

資本主義に関する三つの研究：シュンペーター、 ヴェーバー、ゾンバルト

白 井 陽 一 郎

要 約

シュンペーター、ヴェーバー、ゾンバルトの研究を概観しながら、それら相互の関係を検討すること、これが本稿の課題である。ただし本稿は、三者の思想的・理論的体系を包括的に論じ・比較するという形での、十全たる学説史的・比較思想的な研究にまでは到っていない。飽くまで、彼らの学説を資本主義という点に集約させながら要約的に概説し、相互の連関を吟味していくにとどまる。

序論 問題の所在と本稿の概略

近代の経済社会の根本的特質は何であろうか、これが本稿において基本となる問題意識である。

本稿で取り上げるシュンペーター、ヴェーバー、ゾンバルトの三者は、資本主義を論じつつも実はより深く、そこに近代の近代たる所以を探究しようとしたと考えられる。それ故、彼らの資本主義論を吟味していくことを通じて、より本質的に、彼らが近代経済社会の根本的特質を如何に捉えようとしたのかを問うことができる。しかも、後に見て行くように彼ら三者の議論の間には、近代経済社会の根底を探るという点で良き補完関係を見出すことができる。

本稿においては、次の二つの図式を三者の中に見い出し、それらの間の補完関係を際立たせてみたいと思う。

第一。ゾンバルトは近代的な経済の歴史的な個性を捉えるために、形態(Form)、精神

(Geist)、技術(Technik)という三つの指標を提示する。彼はそれらによって資本主義を極めて包括的に論じていくのだが、しかしヴェーバーとシュンペーターは、その個々の点をさらに一層理論的に深化させている。すなわち、ヴェーバーは形態の中の「経営組織」と精神の中の「合理主義」という点において、またシュンペーターは精神の中の「企業者精神」という点において、それらの意義をより一層先鋭なものにし、それぞれゾンバルトの包括性を部分的にさらに一段と深化させているのである。

まずシュンペーターは資本主義の本質的特徴を、経済それ自身による動態的な発展、という点に見い出す。その限りにおいて、資本主義は近代以前の経済とは異なる近代固有の経済であるとされる。彼はこの発展の理論的根拠を問い、企業者による新結合の遂行という事実に着目するとともに、この企業者を突き動かす精神の特殊性を強調する。しかしシュンペーターは、資

本主義はその進展とともに組織を官僚制化させ、企業者精神を圧殺していくと見る。

他方でヴェーバーは資本主義における本質的特徴を、まさにこの経営組織の官僚制化、という点に見出す。彼は西洋近代の歴史過程を合理化の進展として捉え、経済におけるその現れを形式合理性の高度化、という点に見て、それを生み出し推進する制度的条件と精神の有り様とを検討する。そして、官僚制的組織こそ形式合理性の高度化に極めて適合的であり、それはまた職業義務の思想に即した禁欲的労働によってより良く作動せしめられるとした。

従ってヴェーバーに即して言う、シュンペーター流の経済発展の経済社会学的条件の中には、実は既に組織を官僚制化せしめる内在的要因が胚胎していた、ということになるだろう。しかしまたヴェーバーが論じた資本主義の精神からは、決してシュンペーターが解明したような資本主義に固有の動態的な経済発展を導き出すことはできない。それ故この二点において、ヴェーバーとシュンペーターの研究は補完的關係にあるといえよう。

第二。こうしたヴェーバーとシュンペーターの議論は、その立論の過程で近代経済に特有の事実を指摘している。ヴェーバーにとってそれは、人が労働を絶対的な自己目的とし、ただひたすら利潤追求に仕えているという事態であり、彼はそれを、個々人の幸福や効用から全く超越した端的に非合理的なものとして見る。またシュンペーターにおいてそれは、経済それ自身による自発的な発展という事態であり、彼はそこに、ますます多くを(plus ultra)という標語によって表される決して飽くことを知らない強烈な欲望の発露を見る。しかし両者はこのよう

な事態の歴史的な意味について、もう一歩立ち入って解釈しようとはしなかった。

その点ゾンバルトはより深く、そこに近代固有の世界観の成立を見て取る。彼は晩年に自らの体系を経済時代という中心概念によって総括する。近代は経済が他の文化領域から解き放たれて、自らの固有の論理によって一人歩きし始め、さらには他の文化価値を自らに従属させているという意味において経済時代と呼ばれるべきであり、経済の自律的發展(オートノミー)の形態である資本主義は、まさにこのような時代の産物であると彼は捉えるのである。

そうしてゾンバルトにとって、このような時代の支柱とされるのが、近代技術である。彼は、経済時代のもう一つの顔として技術時代という側面を強調する。経済の一人歩きは近代特有の技術の形態によって加速されるのであり、しかも経済時代の人間はその無限の進歩を無反省に賞賛する。しかし近代技術の本質はゾンバルトの見るところ、「自然の有機的制約からの解放」という点にあり、そこには人間が制御しきれない悪魔性が潜んでいるとされる。

以上二つの図式を念頭において、三者の議論を概説して行くことにしよう。

第一章 ゾンバルトの経済システム

経済システムの理念

資本主義という経済のあり方には、如何なる特徴があるのだろうか。

一口に資本主義と言っても、アメリカ型、ドイツ型、日本型等々様々な差異が在るだろう。また、そこから資本主義システム間競争という事態が注目されてもいる。

しかし、およそ資本主義的である以上、どの

ような型の資本主義にも通底している基本的な特徴が存在しているはずである。その場合この特徴は、共時的な比較の指標ではなく、通時的な、つまり近代的な経済のあり方と前近代的な経済のあり方との比較の指標ともなるだろう。ゾンバルトの「経済システムの理念(die Idee der Wirtschaftssystem)」(OdW, S.14)は、まさにそのような指標として捉えられる。それは極めて包括的であり、以下本稿においてもこれが前提とされる。

さて、我々が経済現象と呼ぶのは、社会において無限に存在する経験的事実の中で経済的だと考えられた一部分であり、それ故それは思惟によって主観的に分節された事柄に過ぎない。従ってその分節のあり方が恣意的であればあるほど、それだけ経済現象の学問的な取扱いは困難になる。恣意的な主観的にあれやこれやの要素を偶然に任せてもってきたのでは、学問的な取扱いが可能になる対象化はできない。

それ故、経済現象を学問的に取り扱えるように分節するためには、それを論理必然的に規定するための一定の観点が必要となる。ゾンバルトはこの観点を、「経済の理念」(die Idee der Wirtschaft)として提示する。それは、プラトンの意味でのアイデアとでもいうものであり、この経済のアイデアによって始めて、学取的取扱いが可能になるような形で経済現象を対象化できるのである。

ゾンバルトはこの経済の理念を、精神(Geist)、形態(Form)、技術(Technik)という三つの基本的構成要素から形成する(ebd.)。彼は、この三つの要素をさらにいくつかに分細化し、経済にとって本質的な特徴は、それらによって網羅し得ると考えたのである。

すなわち、まず精神は、経済主体の動機や実際の行為を方向付ける原理である経済志向(Wirtschaftsgesinnung)を通じて把握され、それはさらに次の三つの対立軸に細分化される。第一、欲求充足原理か営利獲得原理か。第二、伝統主義的か合理主義的か。第三、連帯主義的か個人主義的か。

次に形態という場合、それは組織形態あるいは秩序のあり方といった事柄を指し、次の六つの対立軸に細分化される。第一、拘束的か自由か。第二、共同経済的か私経済的か。第三、貴族制的か民主制的か。第四、閉鎖的か開放的か。第五、欲求充足経済的か流通経済的か。第六、個人経営的か会社経営的か。

最後に技術の場合、次の三つの対立軸が形成される。第一、経験的か科学的か。第二、停滞的か革新的か。第三、有機的か無機的か(以上、OdW, S.20.)。

そして経済現象は、これらの要素の組み合わせ方に応じて、一つの有意義な統一体として把握できるとされる。このような、経済の理念から必然的に導出される経済現象の有意義的統一体(sinnvolle Einheit)を、ゾンバルトは「経済システム」(Wirtschaftssystem)と呼ぶ(a. a. O., S.14.)。すなわち、経済現象は一定の精神によって支配され、一定の組織形態を持ち、一定の技術が使用されることによって、一つの経済システムへと統一的に把握されるのである。

こうしたゾンバルトの経済システムという枠組みは、歴史的に変化していく経済のあり方を捉えるための指標であり、一定の歴史的時点における経済のあり方の特性なり個性なりを把握するための概念装置であると理解できよう。

資本主義の基本的特徴

では、資本主義システムはこの経済システムという概念装置によって、如何に特徴づけられるだろうか。

まず形態という点から見る場合、ゾンバルト自身の要約に即して言う、資本主義は次のような特徴を持つ。私的・流通経済的組織が支配的であり、生産手段の保有者（資本家）、生産の指導者（企業者）、無産の労働者という異なる階層が市場を通じて関係し合うことによって、規則的に協働する（PEdmK, S. 2）。

次に技術という点から見ると、資本主義においては、科学的無機的方法によって有機的自然の限界を打破していく、革新的技術の利用が支配的となっている（a. a. O., S. 2）。この技術という視点は極めて重要であり、後に第四章のゾンバルトのところで詳論することになる。

最後に精神の観点から見ると、資本主義では次の三つの経済志向が支配的である。一つは営利獲得原理であり、各人はもはや自らの生計を賄うのに必要なだけでなく、それ以上に無限に営利を追求するようになる。二つ目は競争原理であり、そして三つ目が経済合理性である。ここで経済合理性という場合、それは計画性、手段選択の目的適合性、計算可能性という内容を持つ（a. a. O., S. 7～8）。ゾンバルトはその大著『ブルジョア』において、資本主義の精神を大きく企業者精神と市民精神とに区分しているが、前者はここで言う営利獲得原理と競争原理に、また後者は経済合理性に、それぞれ照

応していると言えるだろう。

以上がゾンバルトの把握した資本主義の姿である。飽くまでベーシックなものにすぎないが、その包括性は資本主義の問題性への視野を広げてくれる。

さて、以下論じていくシュンペーターの議論もヴェーバーのそれも、彼らの意図はともかく、このゾンバルトの経済システムの枠組みの中の特定部分を特に取り上げ、その意義を先鋭なものにして行った研究として捉え返すことができる。すなわち、シュンペーターにおいてはその企業者精神という点が、またヴェーバーでは合理主義と、形態の中に位置づけられる経営組織という点が、それぞれより意義深く討究されているのである⁽¹⁾。

しかしそれは飽くまでそのシステムの枠組みの特定部分に過ぎず、後にみるように本稿で問題に取り上げる限りでの両者の議論は、ゾンバルトの資本主義論の根本的前提をなす概念（経済時代における経済至上主義）に引きつけられることによって、より完全なものとなるだろう。

資本主義の時代区分

上述のようにゾンバルトの経済システムの枠組みは、一定の経済システムの歴史的な個性を捉えるという目的を色濃く持った、いわば通時的比較のための指標の体系である。彼はそれによって、資本主義を三つの時代に区分する。

第一、初期資本主義（Fruehkapitalismus）。15世紀の中葉から19世紀の中葉まで。ここでは企業者も労働者も未だ半封建的、半手工業的で

(1) 勿論、ゾンバルトも大著『近代資本主義』の中でそれらの部分を詳細に検討している。しかしことこの二点に関しては、ゾンバルトを離れてシュンペーターとヴェーバーの研究を参照の方がより有益であるように思われる。それによってゾンバルトの経済システムの枠組みをより良く補完することができよう。

あり、伝統主義が色濃く残り、技術もまだ有機的・経験的なものが支配的であった。経済生活においては人格的色彩 (personale Faerbung) が強く、各人は買い手と売り手との契約においても、企業内部における使用者と被用者との契約においても、人格的紐帯 (persoenliches Band) が重きをなしていた。生産の場での家族主義的労働関係 (patriarchalisches Arbeitsverhaeltnis) がまだまだ見られた。それ故この時期は、前近代から近代への過渡期という性格を持つ (a. a. O., S.25)。

第二、高度資本主義 (Hochkapitalismus)。19世紀の中葉から第一次世界大戦まで。この時期において、資本主義経済システムの本質は最も純粋に現れる。すなわち、営利獲得原理と経済合理主義が支配的になり、科学的無機技術がいよいよ中心的に使用されるようになり、経済の全面的商業化が始まる。そして、経済生活における人と人との関係は即物化 (Versachlichung) され、もはや人格同士の紐帯は消滅していく (a. a. O., S.24~26)。

第三、後期資本主義 (Spaetkapitalismus)。第一次大戦以降。これは資本主義が衰退し次の経済システムへと変わり行く過渡期である。この時期以降、資本主義的経営組織の官僚制的機械化はいよいよ進展し、官僚制的行政メカニズムによる私経済領域の侵食が進み、半公共的組織の活動が自由企業にとって代わり出す。また賃金労働者の影響力が高まり、「資本主義経済を共同経済的・協同組合的原理が貫徹する。」 (a. a. O., S.26)

以上が、ゾンバルトによって把握された資本主義の来し方行く末である。我々は現在後期資本主義の時代にいることになる。ゾンバルトは

1941年に逝去しているが故に、第二次大戦後の資本主義の再度の繁栄を知らない。それはあたかも今一度高度資本主義の時代が訪れたかのようであった。しかし彼が後期資本主義に読み込んだ諸要素は、現在の先進資本主義国に多く見い出せる。そして、シュンペーターもヴェーバーもやはり同じく、官僚制的機構による人間精神の束縛という事態を見ているのである。しかし、彼らが資本主義論を展開していく上で重点を置いた場所は、それぞれ異なっていた。

すなわち、シュンペーターの場合初期から高度期にかけて資本主義が見せた動態的な発展過程の理論的根拠が問題にされた。またヴェーバーの場合資本主義の展開過程ですます貫徹していく形式合理性が問題であり、それは既に初期資本主義を産み出した心理的起動力 (エートス) に胚胎していたとされる。そしてゾンバルトの場合資本主義時代を創出し規定している世界観が、経済至上主義が支配的となる経済時代、という形で問題化されている。

以上の三者それぞれが最も得意としてるところを抽出し、それらの相互の連関を考察していくことによって、資本主義の本質へと、従って強いては近代経済社会の根本的特質へと、より良くアプローチすることができよう。まずはシュンペーターから見ていくことにする。

第二章 企業者精神の衰退：シュンペーター

経済発展の経験的特徴

近代以前と近代以降の経済現象には、如何なる本質的な差異があるだろうか。

資本主義を近代固有の経済システムとして捉え、その歴史的な個性を認識しようとする場合、

まずは近代以前と以降との間の差異が注意されねばならない。シュンペーターはその差異を、経済変動の有無に見い出した。彼によると、「資本主義とはその本質からして経済変動の形態あるいは方法であって、決して定常的(stationary)ではなくまたそうであり得ない。」(CSD, p.82)

では、この近代資本主義に固有な経済変動は如何なる様相を見せるだろうか。18世紀後半以降の経済を観察すると、次のような長期に渡る景気変動の波が見えてくる。シュンペーターによるとそれは、一回目が1780年代に始まり1800年にピークを迎え1840年代の初期に終わる波であり、第一次産業革命を中心としている。次は1840年代に始まり1857年にピークを迎え1897年に終わる波であり、第二次産業革命を中心としている。そしてそれは1900年代にまた上昇し出し1911年にピークを迎え、シュンペーターが逝去した1950年現在衰退しつつあるとされた(op. cit., p.67)⁽²⁾。

これはコンドラチェフ波動と呼ばれる経済活動の長期波動であり、シュンペーターはここに「資本主義過程の本質的なメカニズム」(ibid.)を見出す。彼は、このメカニズムを明らかにすることによって資本主義の本質に迫れる、と考えたのである。そこでこの波動がさらに詳しく観察される。シュンペーターはこれらの波動の始まりに、既存の産業構造を再編して行くような革新が生産の側に生じていることを突き止める。それは次の五つの形態のいずれかをとっている(op. cit., p.68)。第一、新生

産方法の導入(工場の機械化、電化。化学合成等)。第二、新製品の発売(鉄道サービス、自動車、電化製品等)。第三、新組織形態の採用(企業合併等)。第四、新原料供給源の所有(ラプラタ羊毛、アメリカ綿花、カタンガ銅等)。第五、新貿易ルート・新市場の発見。

これらの革新は波動の始まりにおいて、たびたび進入してくる短期の景気の波によって妨害されながらも、経済を活気づかせ繁栄をもたらす起爆剤となる。しかしやがてこの革新による産業の再編成が完成し、古くなった産業構造が捨て去られ、革新の成果が普及し出すと、経済は再び不況に陥っていく。こうした動向の中で、価格・利子率・雇用が昇降する。「以上の現象が、生産装置の再生という資本主義過程のメカニズムの諸部分を構成する」(ibid.)のである。

このように資本主義に固有の経済変動である長期波動は、既存の産業構造の再編成をもたらすのであり、その意味でシュンペーターはそこに「資本主義過程の発展的性格(evolutionary character of capitalist process)」(op. cit., p.82)を見た。

しかもそれは、次の点で重要である。長期波動の形態をとる経済変動は、決して経済の社会的・自然的環境といった経済行動の与件の変化によるものではない。人口や資本の増加によるものでもなければ、通貨制度の気まぐれな変化によるものでもない。そうではなしに、この波動による発展は飽くまで経済それ自らの自発的な発展である。従って、そこには言葉の最も正確な意味での「経済発展(wirtschaftliche

(2) その後一九五〇年代以降オートメーション化やモータリゼーションが本格化し、第四の波が生じたと考えられよう。第一章で述べたように、第二次大戦後の工業先進国の経済はもう一度高度資本主義期を迎えたかのような様相を見せたが、それはこの第四の波によるものである。

Entwicklung)」が見い出せるのである。

そして、この発展という「資本主義のエンジンを起動させ動かし続ける基盤的刺激(fundamental impulse)は、資本主義的企業がもたらす新消費財・新生産方法・新市場・産業組織の新形態に由来する。」(op. cit., p.83)これらの革新が既存の産業構造を破壊し、新しい経済的可能性を与えるのであり、このような「創造的破壊の過程こそ、資本主義についての本質的事実である。」(ibid.)

シュンペーターは以上のようにして、資本主義の外面的経験的特徴を、企業の創造的破壊による・経済の自発的な・経済発展に見い出したのであった。しかし、それは飽くまで経験的観察によって外面的にそのように見えてだけである。それ故このような経験的分析の他にさらに次のような理論的問題が問われねばならない。そのような発展はそもそも如何なる根拠によって存在し得るのか。すなわち、経済の自発的な発展の存在根拠の理論的説明がなされなければならない。シュンペーターは自らの名を不朽のものとした『経済発展の理論(Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung)』において、まさにこの問題に取り組んでいる。

彼はそこで経済発展を次のように正確に定義している。「発展(Entwicklung)という場合、それはただ次のような経済生活の循環の変化としてのみ、理解されるべきである。すなわち、経済が自分自身から産み出した変化であり、経済自身にゆだねられ・外部からの衝撃によって駆り立てられたのではない・国民経済の変化が、それである。」(TdwE, S.95)それ故この発展は、「経済生活それ自身が自らの固有の与件を急激に変える」(a. a. O., S.94)という形で現れる。

近代的な経済のあり方は、このような経済発展をもたらしているが故に、資本主義と規定されるべきなのである。

静態経済の仮定

シュンペーターは、このような発展が如何なる根拠によって存在し得るのかを問うために、まず静態経済(die statische Wirtschaft)の仮定から出発する。これは次のような仮定である。そこにおいては「ただ自動的なメカニズムが存在するだけ」であり、「過去において経済を支配していた与件は既知のものであり、またその与件が変化しないままにいるときには、経済は再び同じように運行するだろう。与件が被り得る変化は全く知られてはいないが、しかし原則的にその与件の変化に経済主体は良く追随し得る。経済主体はいわば何物も自発的には変化させない。」それ故この経済主体は、「所与の諸状況が変化したにも拘らず今までと同じやり方で経済が続けられようとしている場合に、経済の与件と経済の遂行との間に生じてくる乖離を除去する」(a. a. O., S.27)だけである。

すなわち、この静態経済において経済主体はただ所与の条件に反応するだけであり、ここにおいて経済は「毎年毎年同じように存在する(jahraus jahrein so wie es ist)。」(a. a. O., S.75)たとえ経済に攪乱が生じたとしてもそれは経済の与件の変化によるものであり、経済主体はただ新しい与件へと順応して行くだけである。つまりこの静態経済という仮定によって問題にされているのは、経済に対する与件の変動の影響であり、経済主体がその作用に如何に順応していくかという点での事柄の必然性である。

そしてこの仮定の下での分析が示すところに

よれば、与件の変化によって経済過程に変化が起こっても、経済は常に同一の均衡状態へ向かう傾向を持つ。このようないわば有機体の血液循環にも相似した経済の「慣行の軌道 (die gewohnte Bahn)」(a. a. O., S.93) という必然性が、静態経済における本質的事実となるのである⁽³⁾。

従って、このように定義された静態経済の仮定の中では、事柄の必然性から受ける圧力の作用が問題になっているだけで、そこには何らの創造的な役割も存在していない。しかしそうであるが故に、このような静態経済にあってなおも経済自身による自発的な与件の変動が可能であるとしたら、それは如何なる要素を新たに付け加えれば良いのか、という問いを設定することができる。そしてこれを解明することによって、経済の自発的な発展の存在根拠を理論的に明らかにすることができるだろう。

新結合

そこで、シュンペーターはまず経済発展の性格を静態経済の仮定に即して検討する。静態経済からみる限り、経済発展とは何よりも慣行の循環的軌道の変更であり、決して均衡状態へ向かう運動ではなく、それ故均衡状態そのものの推移である(a. a. O., S.98)。そして、こうした既存の均衡状態を破壊し、新たな均衡状態をもたらす革新的活動は、経験的事実の示すところによると、生産の側に現れるのであった。

しかしそもそも生産とは如何なることを言う

のだろうか。シュンペーターはそれを、生産要素の結合、と言う事態として規定する。その場合静態経済において毎年毎年本質的に同じ様相を見せる慣行の軌道の中では、一定の結合の仕方が慣行となって繰り返され維持されている、と見ることができる。さてそうだとすると、生産の側がイニシアティブをとった・慣行の軌道からの乖離とは、慣行の結合とは異なる新結合 (neue Kombination) の現れによるものだと、捉えることができよう。

シュンペーターが言うに、この新結合が非連続的に現れるときにこそ経済発展に特有な現象が成立するのであり、それ故経済発展とは、新結合の遂行に他ならないのである。そして経験が示すようにこの新結合は、新しい製品の開発、新しい生産方法、新しい販路の発見、原材料の新しい供給源、新しい組織形態の実現、という仕方で具体化されるのである(a. a. O., S.100～101)。

それではさらに問うて、この新結合は如何にして可能であろうか。経済発展が新結合の遂行である以上、これの可能であることの根拠が明らかにされなければ、経済発展の存在根拠を解明したとは言えない。

銀行の信用創造と企業者

シュンペーターはぎりぎりのところまで静態経済の仮定を厳守する。この仮定をとる以上、新結合のために必要な余分な生産要素は存在していない。それによる分析が示しているところ

(3) 周知のようにシュンペーターはこのような仮定に立脚した静態理論を、ワルラスの均衡理論を模範として構築している。彼によるとこの均衡理論は決して現実離れした空虚な理論ではない。それは与件変動のもたらす経済過程の混乱が均衡へと回復していく、その過程の必然性を明らかにしようという限定された目的を持ったものであり、決して不況の時やまた近代以前に支配的であった定常経済 (die stationäre Wirtschaft) を前提とした理論的想定ではない (TdWE, S.121～122)。

によれば、全ての資源は慣行の軌道の中で最適に配分され使用し尽くされているのである。そのため、仮に新結合が可能だとしたら、それは新たに結合し直すために必要な生産手段を慣行の旧結合から奪取せねばならない。それ故、「新結合の遂行とは国民経済における生産手段ストックの転用である」(a. a. O., S.103)とすることができる。

では、この旧結合からの生産手段の奪取に必要な資金は、如何にして調達されるのだろうか。静態経済の仮定の下では、何ら余分な資金は存在しないはずである。ここにおいてシュンペーターは、静態経済へのまず一つ目の追加事項を設定する。それが、銀行による信用創造である。これこそが生産手段の吸引と生産手段の転用を可能にするのである(a. a. O., S.108~109)。この銀行による信用創造は静態経済において想定されていなかったが、しかしこれなくして新結合は不可能であり、それ故これは経済発展を可能にする根拠の一つとして捉えられる。

しかし勿論これで経済発展の存在根拠が解明されたことにはならない。次のような最も本質的な問いが問われねばならないのである。すなわち、新結合の遂行によって経済発展をもたらす担い手は誰であり、またそれは如何なるタイプの人間であるのか。

この担い手こそ企業者(Unternehmer)(a. a. O., S.111ff)である。これは新結合の遂行という機能を指すだけであって、決して職業でもまた階級でもない。また日常的事務管理の中に埋没した経営管理者でもない。それ故慣行の軌道の中で、計算可能な事柄を合理的な行為によって遂行していくだけの人間ではない。この企業者こそシュンペーターが静態経済に追加した第

二の、そしてより本質的な事項であり、その存在無くしては経済の自発的な発展は決してありえないような機能である。

勿論、静態経済の仮定の中で生産要素の結合のための資金供給者がいないわけでもないし、また当の結合を行う人間がいないわけでもない。静態経済の中にも資金供給者としての資本家は存在し得るし、また結合を遂行する経営管理者も存在しているはずである。しかし、慣行の旧結合から生産要素を奪取するために追加的な資金を生み出すための信用創造と、それを利用して慣行の軌道を離れ新結合を遂行する企業者という機能とは、均衡状態への順応を旨とする静態経済には存在し得ないのである。

それ故、銀行による信用創造とそれを利用して新結合を遂行する企業者の存在こそ、資本主義の発展的性格をもたらす根本原因であり、またそれらは経済領域に属する要素と考えられるが故に、それらによる発展は経済それ自身による自発的な発展と規定することができるのである。またこの両者は、近代以前の経済には存在していない。飽くまで近代的な経済のあり方に固有の機能である。従って、近代的な経済である資本主義の資本主義たる所以を、この両者に求めることができるだろう。

企業者精神

しかし、この両者の中でもさらに企業者の方がより本質的である。というのは銀行の信用創造は企業者という機能によって引き出されるところのものであり、能動的な要素は企業者にこそ存しているからである。ただし企業者とは先にも述べたように機能であって、決して特定の職業でもなければ階級でもない。それ故銀行家

が能動的にイニシアティブをとって企業管理者を炊きつけ、新結合を遂行させるということも勿論可能である。その場合企業者の機能は銀行家という職業にある者が遂行すると言うだけであって、何らことの本质に触れるものではない。

では、この企業者とは如何なる性質を持つのであろうか。シュンペーターは労働を、指導する労働と指導される労働 (leitende und geleitete Arbeit) との二つに区別し、前者の持つ特殊な機能を強調する (a. a. O., S.24ff)。すなわち前者には、経済の静態的循環の中に決して存在し得ないある種の創造的な働きがある。それは自発的に生産の様式や規模や方向性を決定していくという働きであり、慣行の結合を維持するための単なる監督・管理の仕事ではない。こうした自発的創造的機能が静態経済には存在していないが故に、そこでは指導する労働と指導される労働の区別は無意味なものとなる。しかし仮に経済発展が経済それ自身のイニシアティブから生じ得るとすれば、それはこのような指導する労働が存在してはじめて可能になるのである。言うまでもなく、企業者とはこの指導する労働を言う。

さて、こうした指導する労働としての企業者には、次の理由から極めて特殊な資質が要求されることになる。彼は、慣行の軌道の外に出ることによって大きな不確実性に対決してはならなくなる。当然合理的な計画は立てられるが、その計算可能性の精度は静態経済のときと比べものにならないくらい低下する (a. a. O., S.124ff)。また、新しいことを遂行するに当たって周囲から受ける反対や妨害に対しても毅然と立ち向かい、それを克服しなくてはならない。

それ故、企業者という機能を遂行し得るとしたら、それは次のようなタイプの人間であろう。すなわち、慣行にとらわれないビジョンを描く精神的自由を謳歌し、それをビジョンのまま終わらせない強靱な意志を持ち、なおかつ先見の明、人を服従させる能力等を平均的な人間よりもはるかに持った人物である (ebd.)。またそのためあらゆる束縛を打破し、自らの所属する社会階層やそこにおける超個人的な価値体系に対して全く無縁の人物でなければならない (a. a. O., S.133)。

まさにここにシュンペーターの理論を通じて見た限りでの、近代資本主義の精神を見出すことができるだろう。資本主義とは何よりも経済発展によって特徴づけられ、近代以前の経済と区別され得るのであるが、それは先のタイプの人間でなければ担うことのできない企業者という機能によって、はじめて可能になる。それ故そのような機能の遂行に必然的に要請される経済志向 (Wirtschaftsgesinnung) を通じて、近代資本主義の精神を認識することができる。

それは、強靱な意志力を持って、あらゆる束縛にとらわれず、慣行を破壊し、新しいものを創造的破壊によって構築していくという革新的経済志向であり、この志向は、ますます多くを (plus ultra) という標語によって表されるような決して飽くことを知らない強烈な欲望、自己の王国を建設しようとする夢想と意志、勝利への意志、闘争意欲、創造の喜び (a. a. O., 136, 138)、といった精神的態度によって支えられる。逆に言えば、このような精神が企業者機能として現象することによって、はじめて近代資本主義は存立し得るのである。

ここに資本主義の原点とも言うべき、初期の

瑞々しいダイナミクスの源を見ることができるだろう。近代資本主義は、このような企業者精神によって創出され作動せしめられているのである。

資本主義の衰退

しかしシュンペーターは、やがてこのダイナミクスは消滅していくと見る。彼は晩年に次のようなテーゼを提出している。「私が確証しようと尽力するテーゼは、次のようなものである。資本主義システムの現実の将来的なパフォーマンスは、経済的な失敗という重荷故にそのシステムは崩壊する、という考えを否定するほどのものである、しかしにも拘らず、資本主義システムはまさにその成功故に、自らを保護する社会制度を崩し、不可避免的に自らがそこではもはや生きていくことのできない条件を、すなわち自らの法定相続人たる社会主義への傾向を強力に持った条件を創り出してしまう。」(CSD, p.61) この条件が、経営組織の官僚制的機械化である。

彼は、次のような事態を見ていた。技術進歩が進めば進ほど、それはますます訓練された専門家によって官僚的機構の中で行われるようになり、革新(innovation)そのものが日常的な業務(routine)に成り下がる。かつて天才の閃きの中ではじめてビジュアライズされたものが、厳密に計算されて行われるようになる(op. cit., p.132)。合理化の進展の中で社会環境や自然に対する支配が完全になり、行為の計算可能性が高まれば高まるほど、それだけ企業者の存在意義は低下していく(TdwE, S.126)。すなわち、「たとえ企業者活動(entrepreneurship)を第一次的な動因とする経済過程それ事態は消滅

することなく継続したとしても、この社会的機能は既に重要性を失いつつあり、また将来的には加速度的に重要性を失って行かざるを得ない。」(CSD, p.132)

こうした状況の中で、もはや資本主義的企業者は必ずしも成功のために個人的な力と責任とを持って活動する指導者である必要はない。合理化され専門化されたオフィスワークが個人的資質を無意味化し、計算可能な結果がビジョンを消し去り、指導者はもはや取り替えられるのに何らの困難もともなわないもう一人の事務員となる。今や経済進歩の過程そのものが非人格化され自動化されるのである。ここにおいてもはや新結合の遂行は、定常経済の管理と同じ様な管理された日常業務と化す(op. cit., pp.131～133)。

以上が、シュンペーターによる資本主義の命運である。

第三章 形式合理性の貫徹：ヴェーバー

西洋近代への問い

ヴェーバーは極めて多方面に渡る研究を遂行したが、その問題意識は次の一点に集約される。「普遍的意義と妥当性を持って発展する傾向にある文化現象」が「西洋の地(Boden des Okzidents)にのみ生まれた」のは、「如何なる諸事情の連関によるのか」(GAzR, S.1)。

国際的に先進国と呼ばれるのは、かなりの程度西洋的な意味で近代化された国々だけである。ヴェーバーはこの西洋近代の個性をあらゆる文化領域において探るとともに、その源流に遡ろうとしたのである。

では、ヴェーバーはこの西洋近代の個性を如何なる点に見い出したのだろうか。彼は西洋の

各文化領域を概観しながら、西洋のみが生み出し得た事柄を探究する。

例えば、経験から何らかの法則を学ぼうとする科学などは、歴史上如何なる時代にも地域にも存在しているが、しかし数学的基礎付けを持って合理的な証明を行い、合理的な実験で検証し、合理的な概念によって体系化していくという形で科学は、西洋にのみ生まれた。しかも現在世界中でこれのみが普遍的妥当性を持つとされている(a. a. O., S.1~2)⁽⁴⁾。

この科学は、合理的に組織化された専門教育システムに則った合理的・体系的専門経営(rationale und systematische Fachbetrieb)により再生産され、訓練された専門人を多数輩出している。このような教育制度も西洋ではじめて成立した(a. a. O., S. 3)。この専門人が近代科学や近代国家の支柱となって、不可避免的に「現代の生活全体を、すなわち我々の存在の技術的・政治的・経済的基本条件を、訓練された官僚組織という外枠(Gehaeuse)へと絶対に逃れられないように縛りつけていく」のであるが、この特殊近代的な意味での官僚組織も西洋のみが生み出した(ebd.)⁽⁵⁾。

そうしてこれらの科学や官僚組織に支えられ、現在世界中で支配的な地位を獲得している経済のあり方、すなわち「我々の近代的生活の運命的な力」(a. a. O., S. 4)となっている資本主義もまた、西洋だけが創出したのであった。

そこでヴェーバーは、西洋のみが生み出し得た事柄の底辺に一貫して存している或る傾向を、抽出しようとする。それが、科学・国家・経済の発展においてとられた、西洋固有の意味での合理化という軌道である(a. a. O., S.11)。

それでは、西洋文化に特殊な合理主義とは如何なるものだろうか。

西洋固有の合理性

人間が合理的に行為するという場合、ヴェーバーは次の二つケースに区別する。一つは目的合理的(zweckrational)行為であり、それは「外的世界の対象物や他者の反応への期待を通じて、またこの期待を、結果を求めて合理的に追求され考量される自己の目的のために条件または手段として利用する中で」(SG, S.12)行われる。もう一つは価値合理的(wertrational)行為であり、それは「一定の行為が持つ倫理的、美的、宗教的あるいはその他の無条件に妥当する独自の価値への意識的な信仰を通じて、純粹にその結果とは拘りなく」行われる行為である(ebd.)。

すなわち前者は、目的・手段・副作用の間の関係、また目的に対する手段の関係、そして可能な各種の目的の間の関係を、合理的に考量して行われる行為であり、競合する目的を決定するに当たって、何らかの禁止や要請へと価値合理的に方向づけられることなく、主観的な欲望

(4) また、芸術の領域について次のように概観されている。音楽に関しては、合理的記譜法をあみだし、合理的な調和音楽(rationale harmonische Musik)たとえばオーケストラを形成したのは西洋のみであり、また建築では、ゴシック様式を建築上の原理として合理的に使用したのは西洋だけであり、絵画においても、西洋のみが直線透視画法(rationale verwendung der linear-und Luftperspektive)を合理的に使用している。つまり、芸術の領域にも合理化という事態が現れているとされる(GAzR, a. a. O., S.2~3)。

(5) また、政治や国家に関して、次のように言われる。定期的に選挙される国会議員から成る議会、政党党首が議会に責任を持つ首相として支配する政党制、そして合理的に制定された憲法や法律を持つ・政治的アンシュタルトとしての国家なども、西洋固有のものである(GAzR, ebd.)。

の切迫性を基準とするような行為である。それに対して後者は、無条件に妥当すべき価値を追求するのであり、特定の行為目的の結果はこれを重視しない。そうして価値合理的行為において志向される価値が絶対的なものへと高まれば高まるほど、その行為は目的合理性からみて非合理的なものとなる(a. a. O., S.13)。

ヴェーバーが経済に関して合理化過程という場合、それは伝統的行為が合理的行為にとってかわり行くという事態を指しており、後述のようにさらにそこにおいて、価値合理的行為が目的合理的行為へと変貌を遂げていくという過程が問題化される。すなわち、禁欲のプロテスタンティズムの倫理に基づく価値合理的行為が、資本主義における単なる営利を求めた目的合理的行為へと変貌するというヴェーバーのテーゼである。経済の領域における西洋固有の合理化過程とは、経済において目的合理的行為が支配的になっていくというこの事態を言うのである。

しかしこれは逆に言えば、二つの合理的行為の区別は経済の領域においてこそ、最も明確に区別され得たのである。ヴェーバーは経済行為における合理性を、二つの合理的行為に即して次のように区分する。一つは経済行為の形式合理性(formale Rationalitaet)であり、これは経済行為の事前の配慮に関する計算可能性の程度を指す。もう一つは経済行為の実質合理性(materiale Rationalitaet)であり、これは経済行為において何らかの価値的要請に従う程度を言う(SGdW, S.44~45)。明らかに、前者の形式合理性は目的合理的行為の実現の度合いを言い、後者の実質合理性は価値合理的行為の実現の度合いを言うものと捉えられるだろう。

ヴェーバーにとって近代資本主義とは、目的

合理的行為が支配的となり、形式合理性が最大限実現されていく経済システムを言う。そしてそれに規定されるとともに同時にそれを条件づける科学や国家機構においてもまた、この形式合理性が貫徹していく事態にヴェーバーは着目する。すなわち、西洋独自の経済・国家・科学は、形式合理性という点において相互に意味適合的に連関しているのである。

では、そうした資本主義は具体的に如何なる特徴を有しているのだろうか。また科学や国家機構との間で具体的にどのような連関を持つのだろうか。

近代資本主義の特性と成立条件

ヴェーバーが問題にしたのは、決して資本主義一般ではない。西洋近代的な資本主義が、彼の問題であった。

彼によれば、西洋固有の近代資本主義は決して、冒険家的な営利獲得衝動それ自体から生まれてきたのではない。非合理的な投機、暴力による搾取、政治的な搾取等々に方向づけられた営利獲得行為は、世界中の到るところに存在していた(GAzR, S. 4, 6)。

西洋固有の資本主義とはまず第一に、平和的な営利機会(Erwerbschancen)に基づくものであって、それを暴力的な営利獲得カテゴリーに入れることはできない。財市場での平和裡の交換による営利、これに方向づけられた経済行為であってはじめて、西洋固有のものと言える(ebd.)。

勿論これだけではまだまだ世界中に到るところに見受けられる。それ故第二に、資本計算(Kapitalrechnung)を指向した合理的な営利追求方法、という点が指摘されねばならない(a.

a. O., S. 5)。これは初期の資本と決算における資本との差額の計算であり、最終的な収益が決算において初期の資本を超えるように計画的に人的・物的な経営手段を利用する、という目的のために行われる。この資本計算は貨幣計算によって最大限の精度を得る。またそれは複式簿記の発明によって可能になる。

すぐ判るように、初期の資本が決算時における資本を超える、つまり利潤を得るという目的にとって最も合理的な行為であるならば、貨幣による資本計算が行われねばならない。それは利潤獲得を指向する目的合理的行為にとって、最大限の形式合理性を実現するのである。

しかしこれでもまだ不十分である。貨幣で評価した収益が貨幣で評価した投資を超えるように尽力する、ということだけを言うのであれば、そのような経済行為もやはり地上の到るところに存在していたのである。

そこで第三に、形式的に自由な労働の合理的組織化、という点が注目されねばならない(a. a. O., S. 6)。これは、経営資産と個人資産との法的な区別による家計と経営との分離、によって可能になった(a. a. O., S. 8)。

こうしてヴェーバーは西洋のみが生み出し得た資本主義の形態や方向性を、自由労働を合理的に組織化し・貨幣による資本計算によって・市場での平和裡の交換に基づく利潤を最大化していく、という点に求めたのである。

そしてさらにヴェーバーは、このような特性を持つ資本主義の成立条件として、先に挙げた資本計算を可能にする複式簿記と家計と経営の分離という点の他に、次の三点を指摘する(a. O., S. 9～11)。

第一、有価証券の発展と、それにとりまう取

引所における投機の合理化。

第二、技術の使用における計算可能性の向上。単に技術的可能性が発展するだけでは資本主義の進展にとって意味はない。それは営利目的として使用し得るものでなければならない。ヴェーバーは近代自然科学の発展と科学的知識の技術的使用の促進に対して、経済的な報酬が大きな影響力を持ったという点に注目している。

第三、営利活動を行う上で計算可能な法・行政構造。施政者の恣意によって不規則に強制的な規制が行われるのでは、資本計算に克服し得ない不確実性が入り込む。それ故営利活動における資本計算とそれに基づく事前の計画的配慮が確実性を持つために、合理的な法・行政構造はなくてはならない。

この第二、第三の点に見られるように、近代資本主義にとって近代科学並びに近代的国家機構は、利潤追求における不確実性を最大限除去するために資本計算の精度を最大限高める、という点で適合性を持つ。利潤追求のための目的合理的行為は、与件の不確実性が除去されればされるほど、その実現の程度である形式合理性を高度化させることができる。従って、西洋近代固有の資本主義はやはり西洋にのみ生まれた科学・国家機構との間に、形式合理性の最大化という点で意味適合的関連を持つのである。

近代官僚制の機能様式

さて、以上の近代資本主義の特性と条件の中でも、とりわけ形式的に自由な労働の合理的な組織化という点に着目しよう。形式合理性の最大化に最も適合的なのは、近代官僚制的組織構造である。近代資本主義は、奴隷・農奴とは異なる自由人をこの組織へ編み込むことによって

成り立っている。また言うまでもなく、この私的経済領域における経営組織は、公法領域における官庁組織と本質的に全く同一の組織構造を持つ。

ヴェーバーは近代官僚制に特有な機能様式を、次の六つに整理している(VEdbH, S.551~552)。第一、規則による、権限・義務の分配。第二、官職とエラルキー制。第三、事務所と私宅、業務上の事柄と私的な事柄の明別。第四、徹底した専門的訓練。第五、特定の組織における特定の職務への全面的専心。第六、法律学、行政学、経営学等を通じた、規則についての専門的知識。

このような機能様式を持つ組織の特徴は、次の二点に求められる。第一、極めて高い技術的卓越性を持つこと。組織はこの様式によって、あたかも機械のような正確さ・迅速さ・持続性・統一性・費用の節約を実現する(a. a. O., S.561)。近代の資本主義的巨大大企業こそ、まさに厳格な官僚制組織の典型であるとヴェーバーは言う(a. a. O., S.562)。事務処理の最適な反応速度を達成するために、専門的に訓練され、一層の自己陶冶を自発的になしていく職員と、人的差別なき、計算可能な規則(berechenbaren Regeln)への盲目的従属、これこそ市場における経済競争に生き残るための絶対条件であり、資本主義的企業は経済的淘汰によってそれらを強いられるのである。

第二に、その人的差別なき、という点が重要になる。官僚制的組織の中での職務遂行において要求される誠実さは、決して或る特定の人物の人格に向けられるのではない。飽くまで、規則によって定められた即物的・非人格的な目的に向けられるのである(a. a. O., S.552)。ヴェーバーの洞察は以下の通りである。「官僚

制の特殊な、資本主義に好都合な特質は、この官僚制が非人間化(entmensschlicht)されればされるほど、それだけより良く発展する、と言う点にある。官僚制を成功裡に成就せしめるものは、愛や憎しみや全ての純粹に個人的な、総じて全ての非合理的な計算し得ない感情的要素を除外するという、最終的には官僚制の徳性として称揚されるような特質である。個人的な同情、恩寵、恩恵、感謝によって動かされる旧秩序の首長(Herrn)に代わって、近代文化は、それが複雑化し専門化すればするほどそれだけ、自らを支える外的装置としてますます人間的な事柄にとらわれない、それ故厳格に即物的な(sachlichen)専門人を必要とするようになるのである。」(a. a. O., S.563)

そうして技術的卓越性と即物化・非人格化というこうした二つの特徴が、近代文化、特にその技術的・経済的下部構造の特質である「成果の計算可能性」(ebd.)を、最大化していく。従って、形式合理性という西洋近代の個性的要素は、資本主義の中の経営組織という点により良く見出すことができる。

職業義務(Berufspflicht)の思想

上述のように、近代資本主義はたとえ形式的な意味であっても、決して暴力的な強制を受ける奴隷や農奴ではなく、飽くまで自由人の労働を官僚制的組織に編み込む、という点に特徴を持つ。しかしヴェーバーが見るところ、西洋近代の官僚の正確さ・効率に匹敵するのは、歴史的にみて絶対的な服従を強制された奴隷による行政だけである(a. a. O., S.558)。それ故、自由労働をして官僚制的組織構造の合理性を最大限実現せしめるような精神的態度とはいかな

るものか、という点を問うことができるだろう。近代資本主義の本質的な事実として経営組織の官僚制的構造という点を指摘できる以上、そのような組織を自発的により良く運営して行こうとする行為の志向性こそ、資本主義の精神と呼ぶことができる。

ヴェーバーは近代資本主義に最も適合的な精神のあり方を、ベンジャミン・フランクリンに語らせる。曰く、時は貨幣なり、信用は貨幣なり、貨幣は本来生殖力ある実り豊かなるものなり、仕事において時間の正確と公平を守るべし等々 (pEGdK, S.31～32)。ヴェーバーはここに一つのエートス (Ethos) が表明されていると見る。単にでき得る限り儲けようとするのではない。そこには「倫理的に彩られた・生活態度の格率という性格」が存している (a. a. O., S.33)。このエートスは中国にもインドにもバビロンにも、また古代にも中世にも存在しない、「西欧的・アメリカ的資本主義」に固有のものである (a. a. O., S.34)。そう彼は洞察する。

そこでさらにこのエートスを詳しく見ていくと、資本主義文化に特徴的な社会倫理である、「職業義務 (Berufspflicht)」 (a. a. O., S.36) という思想が浮かび上がる。これは、「あたかも労働が絶対的な自己目的すなわち天職 (Beruf) であるかのように」 (a. a. O., S.46) 働くのを倫理的によしとする思想であり、資本主義的な成功のための条件に自己の生活を適応させること、それ故貨幣の獲得を人間に義務づけられた自己目的つまり天職として自己に課す

ること、を意味する (a. a. O., 56)。

近代資本主義は、何等訓練のない、また如何なる内面的な規範にも従おうとしない、単に営利のみをあたりかまわずむさぼるような者達によつては、決して運営され得ない (a. a. O., S.42)。そうであつては、形式合理性を最大限実現するような経済システムの構築は不可能である。そのためには繊細な注意力や創意を必要とする労働、特定の優れた技能を要する労働、これらの労働が勤務時間内に最大限の生産性を發揮して遂行されねばならない。最大限の自己節制、克己心が要請される (a. a. O., S.46～47)。その意味で職業義務の思想は、利潤最大化のために形式合理性を高度化しようとする資本主義システムに、最も適合的な行動形態を提供する。

従つてヴェーバーは、「天職であるように (berufsmässig) 組織的かつ合理的に正当な利潤を追求する、という志向 (Gesinnung)」を、近代資本主義の精神と呼ぶのである (a. a. O., S.49)。

では、こうした西洋近代固有の資本主義を支え作動させる精神の源流は、どこに求められるだろうか。周知のようにヴェーバーは、禁欲的プロテスタンティズムの倫理と上述の資本主義の精神との間の高い意味適合性に着目し、前者を後者発生の主たる要因の一つとして見るという仮説を打ち出している。

さて、禁欲的プロテスタンティズム⁽⁶⁾の主要な教義の一つに、予定説がある⁽⁷⁾。人間は自己

(6) ヴェーバーが禁欲的プロテスタンティズムという場合、それは次のような諸教派を指す。①一七世紀に主流となった形でのカルヴィニズム、特にカルヴァン派から派生したイギリスのピューリタニズム。②敬虔派。③メソジスト派。④再洗礼派運動から派生してきた諸教派。(pEGdK, a. a. O., S.84)

(7) ヴェーバーは一部の宗教的達人並びに教派のエリートの宗教的意識と、一般大衆に平均的に広まった教義の理解の仕方とを分けて考え、あくまでも後者を問題にしている。

の力によって救いを得ることは決してできない。懺悔をしようが、(カトリック的に)教会のサクラメントに参加して祈りを捧げようが、さらには神秘的な瞑想をしようが、それは飽くまで地上における事柄であって、現世と完全に隔絶した神に対して、全く何等の影響も及ぼし得ない。或る人間が救われ、神の国へ迎えられるかどうかは、神があらかじめ予定していることであって、有限者たる人間にはそれを如何ともしがたい。

このような教義は信徒一人一人を強烈に捉え、彼らに絶えざる不安・苦悩を与えた。それ故自分が一体選ばれているのか否か、如何にしたら選びの確信を得ることができるのか、という問題が、他の事柄を一切無のものとするほどに彼らを捉えて離さなかった(a. a. O., S.102)。

こうした精神状況の中にあって、現世内の禁欲的な職業生活において救いの確信を得るという方法が、大きな力を持って広く行き渡るようになった(a. a. O., S.105)。これは自己の労働を神から与えられた天職として捉えるという思想に基づくものであり、現世内での厳しい禁欲的労働の中で、自分は選ばれているのか捨てられているのかの絶えざる厳しい「組織的な自己審査(systematische Selbstkontrolle)」(a. a. O., S.111)を行うことを通じて、自分で自分の救いの確かさを創出する、というものである。仮に天職としての禁欲的労働を完璧に遂行し得ているのならば、それは神が望んでいる事柄であるが故に、自分は救われているであろうと、そう考えられたのである。

救いの確かさを得るためのこのような天職としての禁欲的労働は、非合理的衝動や無軌道な本能的享楽を抑制し、一定の倫理的観点からす

る持続的・計画的な合理的生活態度を形成していく。また他方で、結果として蓄積されていく利潤は地上における神の栄光を高めるとして、より一層の営利が推奨される。すなわち、貨幣は決して自己の享楽のために支出すべきではなく、逆に神の栄光を高めるために不断の労働によってそれを増加させねばならない、とされたのである(a. a. O., S.189)。

こうして禁欲のプロテスタンティズムは、第一に富の非合理的衝動による使用や奢侈的消費を圧殺し、第二に信徒達を神から委託されたとする財産へと、精巧な営利機械(Erwerbsmaschine)のごとく従属させていった。当然その結果は禁欲による節約の強制と資本形成の促進であり、従って禁欲のプロテスタンティズムはまさに資本主義の倫理的基礎として、その発展に大きな影響を与えて行ったのである(a. a. O., S.189,190)。

近代資本主義の運命

しかしやがてこの神の国を求める情熱は、単なる功利主義へと変貌していく(a. a. O., S.197)。禁欲のプロテスタンティズムがもたらしたのは、仕事のために人が存在し、決してその逆ではないという生活態度であり、消費のため享楽のためでなくただ絶対的な自己目的として、すなわち天職として労働する、という心的態度であったのだが、この個人的な幸福から言うと極めて非合理的な生活態度は、今や宗教による倫理的基礎付けを喪失していく(a. a. O., S.54)。そのような労働は、もはや宗教によって価値を与えられることなく強いられる。「ピューリタンは天職を遂行する人間(Berufsmensch)たらんと欲した。我々は、そう

ならざるを得ない」(a. a. O., S.203)。神の国を求めた価値合理的行為は、今や利潤を求めた目的合理的行為に変貌し、しかも各人はそれを遂行せざるを得ない。

ヴェーバーは、天職としての労働が宗教的な当為から資本主義経済秩序による強制へと移行した、という点に注意するのである。今日の社会においては、誰でも市場との関わり無しに生きていくことはできない。そうである以上、資本主義経済秩序は各人に特定の規範を強制していく。「今日経済生活において支配的な地位を獲得している資本主義は、経済的淘汰という方法で、自らが必要とする経済主体、すなわち企業者と労働者を教育し創出している。」(a. a. O., S.37)それ故、「資本主義とは合理的な調節によって、非合理的な衝動を飼い慣らすことと同一のもの」(GAzR, S. 4)であると言われる。

そしてこの資本主義による飼い慣らしは、人間性の将来に暗い陰を投げかける。ヴェーバーは近代の職業労働の禁欲的性格が必然的に専門労働への制限(Beschränkung auf Facharbeit)を強制するという点に、人間性のファウスト的全面性の断念(Verzicht auf die faustische Allseitigkeit des Menschentums),を見て取る(pEGdK, S.203)。資本主義の中では、事業における業績と、自己の全面性の断念とは不可分の関係にある。誰でもこのシステムの中で成功しようとするれば、何らかの専門へと自らを禁欲的に特化させねばならない。ヴェーバーは資本主義の運命を次のように叙述する。

「禁欲は僧房から職業生活(Berufsleben)へと移され、世俗内の道徳(Sittlichkeit)を支配し始めることによって、近代的な経済秩序の、

従って機械生産の技術的・経済的前提に拘束された経済秩序の、かの強力なコスモスを構築するのに力を貸すようになった」「そして、このコスモスは今や、単に直接営利活動に携わる者のみでなく、この歯車機械の中に産み落とされた全ての個々人の生活様式を、圧倒的な強制力を持って規定しており、恐らくは化石燃料の最後の一片が燃え尽きるまで、規定し続けるであろう。」(ebd.)もはや天職の遂行は、何等の精神的価値にも結び付けられず、神の国をめざした宗教的情熱に基づく徹底的な禁欲による生活の合理化は、今や「鋼鉄の外枠(ein stahlhartes Gehäuse)」(ebd.)と化してしまうのである。

「こうした文化発展の最後の人々(die letzten Menschen)」は、「精神なき専門人(Fachmenschen ohne Geist), 心情なき享楽人(Genussmenschen ohne Herz)」と化し、「この無(Nichts)のものは、かつて到達されたことのない、人間性の段階に達したと自惚れるのだ。」(a. a. O., S.204)

ここで言う鋼鉄の外枠の一つの例として、先述の官僚制的組織構造を挙げることができる。ヴェーバーは、一度動き出した官僚制はその運行を停止させるのが最も困難な社会構成体となる、と言う(VEdbH, S.569)。官僚制的経営組織は市場での競争に勝ち経済的淘汰を免れるために、個々の官僚・職員に全生活をかけて取り組まざるを得ない任務を与える。彼らは物的にも観念的にも全存在を挙げて自己の業務に縛られる。そのためそこに組み入れられた職員の共同利害は、この機械が動き続けることへと強く結ばれる。すなわち、官僚制的組織は「とどまることなく運行する機械(rastlos weiterlaufenden Mechanismus)」(ebd.)となる。

従って私的資本主義の組織が官僚制的構造を持つようになり、正確な機能を発揮するようになればなるほど、それだけ大衆の物質的運命はますますこの機能に拘束されるようになり、それ故、こうした組織を取り除くことはますます困難となるのである。

第四章 経済時代と技術時代：ゾンバルト

シュンペーターとヴェーバーの関係

以上が、シュンペーターとヴェーバーによる資本主義の精神とその運命である。シュンペーターの場合資本主義は、企業者活動を原動力として発展して行くが、しかしやがて官僚制的組織による革新の自動化をもたらし、企業者精神の存在する場所をなくし、社会主義経済を促進するような社会的条件を創り出していくとされる。他方ヴェーバーの場合資本主義は、禁欲的プロテスタンティズムの倫理から生まれながら、やがてそれを喪い、人間性を形式合理性に即して飼い慣らしていく単なる鋼鉄の外枠と化していくとされる。前者においては企業者の生き生きとした創造力が、後者においては神の国を求めた宗教的情熱が、ともに資本主義の展開の中で喪われていく。ここに語られているのは、資本主義の精神は自らが創り出したシステム故に、初期の瑞々しさ・ダイナミクスを喪出していくという論理である。この点において両者は完全に一致する。

しかしシュンペーターに対しては、次のように問うことができる。資本主義が官僚制的組織化を促進し、企業者精神をなくして行かざるを得ないのは、一体何故なのか。

この問いに対する回答は、まさにヴェーバー

の研究に求めることができる。彼にとって資本主義は、官僚制的組織化によって自らとは正反対の社会主義を生み出すのではなく、その官僚制化そのものがまさに資本主義の本質的事実なのであった。確かに企業者の冒険的革新による経済発展は、資本主義に固有の事実であるが、資本主義はそれだけで永続できない。形式合理性の高度化に自発的に尽力しようとする禁欲的労働に支えられてはじめて、それは継続的に作動する。しかしそのような労働は、経営組織の官僚制化に最も適合的なのである。シュンペーターは、企業者の精神を無意味化させるのは、行為の計算可能性の向上によって不確実性への合理的支配が高まることによる、と言う。ヴェーバーに即して言えば、それは禁欲的労働の官僚制的組織化による形式合理性の高度化、という事態である。そしてヴェーバーにとってそれは、形式的な意味での合理化という、近代西洋の必然的な歴史過程の産物なのである。

他方でヴェーバーの議論に対しては、次のような不足を指摘できる。

形式合理性を高める禁欲的労働は、慣行の軌道の中で計算可能な事柄を合理的な行為によって遂行していくだけの人間、すなわち日常的事務管理の中に埋没した経営管理者であることはできても、そのような精神的態度だけでは決して、資本主義に固有のかのダイナミックな発展を可能にする創造的革新的企業者であることはできないだろう。それ故ヴェーバーの議論からは、資本主義の発展的性格を基礎づけることはできない。近代資本主義を近代以前の経済のあり方から区別する指標として、経済それ自身による発展という点を挙げることができるが、それはシュンペーターの言うような企業者精神

あってはじめて可能である。すなわち、あらゆる超個人的な価値体系にとらわれず、自己の王国を建設しようとする夢想と意志、勝利への意志、闘争意欲、創造の喜びを持ち、新しいものを創造的破壊によって構築していくという革新的経済志向が、それである。

従って、以上の二つの点において両者の研究は補完的な関係を持つ、と言うことができよう。

しかし両者それぞれに対して、次のように問いかけることができよう。シュンペーターの研究もまたヴェーバーのそれも、近代に固有の事実を際立たせている。前者においてそれは、経済自身による自発的な発展であり、後者においてそれは、目的合理的行為がただひたすら利潤追求に仕えているという事態である。これらは、如何に解釈し、意味づけられるべきだろうか。

シュンペーターの場合、ますます多くを(plus ultra)という標語によって表される決して飽くことを知らない強烈な欲望、という点が指摘される。これに突き動かされることによって、企業者活動による経済それ自らの自発的な発展が引き起こされる。またヴェーバーの場合、一切の快楽主義的な観点を厳格に退けた純粋に自己目的としての利潤追求は、個々人の幸福や効用から全く超越した端的に非合理的なものとして見られる。

これらの点に、近代固有の世界観の成立を見て取ることができないだろうか。すなわち、経済が他の文化領域から解き放たれて、自らの固有の論理によって一人歩きし始め、さらには他の文化価値を自らに従属させていくという時代が近代に生まれたのであり、経済の自律的發展(オートノミー)の形態である資本主義は、ま

さにこのような経済時代の産物であると捉えることができるのではないだろうか。

こうした問題提起は、ゾンバルトの「経済時代」という概念に引きつけることによって、より良く論究することができるだろう。

三つの時代区分

ゾンバルトはまず、次のような事実から出発する。それは、人間個々人の生活形成や社会形成において、経済が持つ価値や意義は、時代ごとに異なっていた(WWW, S. 9)、という事実である。ゾンバルトはその相違に基づいて、三つの時代区分を行う。

第一、魔術時代(das magische Zeitalter)。これは、経済がそれ自身宗教的行為の一環であった時代である。ここにおいては、「超感性的な世界」(ebd.)への思いが人間の第一次的な関心であって、経済は「超感性的な力を支配するという目的のための手段」(a. a. O., S.10)として、礼拝的・呪術的行為の中に組み込まれていた。

第二、政治時代(das politische Zeitalter)。ここでは、経済はもっぱら政治的利害に仕え、単なる政治の関数に過ぎなかった、とされる(a. a. O., S.9)。

第三、経済時代(das oekonomische Zeitalter)。我々は今日この時代にいるとされる。ここにおいて経済は他の文化諸領域の制約から解き放たれ、一人歩きを始める。この時代は、「西欧諸国家において18世紀以来形成されてきた」のであり、「今日まで資本主義文化を持った国々を特徴づける」(ebd.)のである。

ゾンバルトによれば、近代は経済時代である、という点で歴史的個性を持つのであり、近代と

いう時代の特徴を、「個人主義」とか「自由主義」という形で捉えたのでは、ことの本質を見誤るのである（ド・社、2頁）。

また近代の特徴は確かに資本主義的生産様式が支配的になっている、という点にも求められるのだが、しかしこれだけでは十分に語り尽くせない一面がある。そこからさらに一步進めて、「経済と経済的利害とが、……他の文化全体を規定してきた」（同）という意味での、経済時代という観点から近代は探求されねばならない。ゾンバルトは、経済の外面的制度的側面である経済様式の資本主義的なあり方よりも、それを支え背後から突き動かしている時代精神に注目し、それを「経済時代」という概念によって把握しようとするのである。

第1章で述べたように、ゾンバルトは資本主義経済システムを規定する項目の一つである精神の欄に、営利獲得原理、を入れている。各人はもはや自らの生計を賄うのに必要なだけではなく、それ以上にしかも無限に営利を獲得しようとする、というのがその内容であった。ゾンバルトにとって資本主義とは経済時代に固有の経済システムなのであり、それは営利獲得原理という資本主義の精神の現れである、ということが出来るだろう。

経済時代の特徴

さて、この経済時代における社会生活の特徴は、何よりもまず次の点に見ることができる。それは、富の持つ意味や意義が他の時代とは根本的に異なる、という点である。ゾンバルトはこの点を、次の三つの側面から説明する（同、26～28頁）。

第一、貨幣価値だけの承認。社会的名声や芸

術的才能、精神的な営為などは、全て貨幣価値ではかられる成果によってのみ、評価されるようになる。

第二、富の出所の転換。かつては政治的権力こそが富の唯一の源泉であったのだが、「今日では、富が権力に通じる。その出所は経済である」（同、27頁）。

第三、富の出所が経済であることに、何らの穢れも認められないようになる。かつては、キリスト教的な意味でもまたその他の意味でも、富を稼ぐことそれ自体に対して、必ず倫理的な心理的嫌悪感が存していたのだが、今やそんなことはなくなる。「経済界の代表者や実業家は、ただそのことだけで土地の名声を受け、国家権力を得る」（同、28頁）ようになる。

このように富だけが唯一の価値とされ、その無限の増殖が進められて行くような社会において、ゾンバルトは次のような三つの事態が生じてきたと見る。

第一、人間の自然からの疎外。「人間は自然から引き離され」「実在するものにおける本能的に確実なものは失われてしまった。」その結果、「もはや昼と夜、夏と冬という永遠の自然現象に生活のリズムを規定されないような人種が生育する。」（同、39頁）夜も眠らない都会の消費生活を見ると、ゾンバルトのこの言説は半世紀も前のものとは思えない。

第二、個人の共同体からの疎外。経済の近代化とそれによる都市化の中で共同体は解体し、人と人との間の関係が破られていく。ゾンバルトは、村落共同体や氏族共同体、職能共同体や労働共同体等々の中に成立していた人と人との関係に、大きな意義を与える。つまり、「かくの如き関係は、なるほど個人を拘束したにちが

いないが、しかしまた個人を抛らしめ、支えたことも確かである」(同、40頁)。それは、「個人にとり単なる情緒的な慰みであったのみでなく、また道義上の拠りどころでもあった」(同)のである。経済時代における個人は、ただひたすら自己の経済的な特殊利益を追い求める自由を得ることによって、かえって自らの拠りどころであった共同体を解体させ、「おそらく歴史上の如何なるときよりも孤独になった」(同)。このように捉えた上で、ゾンバルトは次のような断を下す。「今日の人間は、人間離脱病に罹っている」(同)

ここでのゾンバルトの言説には、一見して復古主義的、保守的な色彩を見て取ることができる。彼の言うとおりに確かに共同体は個人の拠りどころとして、個人を抱き抱え、また個人に尊厳を与えていたであろう。しかしまたその共同体が如何に個人を抑圧していたか、についての反省がゾンバルトにはない、という批判が当然考えられる。

にもかかわらず、ここでは次の点に注意しなくてはならない。ゾンバルトは単に個と集団の関係について無前提にまた無反省に復古主義的な立場をとったのではなく、飽くまで「経済時代」という文脈を想定した上で、近代が失ったものを明示しているのである。ゾンバルトは、近代人は「欲望の奴隷」と化していると言う。つまり、「物財に対する欲求を満たす能力は増大したが、欲求そのものは常に鼻の差だけその充足に先行している」(同、42頁)のが近代なのであり、そこにおいて個人は「常に新しい刺激を求め」(同、43頁)るが故に、ますます不安になって行く、とされる。ゾンバルトは、神から、自然から、共同体から解き放たれた人間が、常

に新しい刺激を求めるようになり、相互に敵愾心を強めて行く、という経済時代の悪しき傾向を反省しつつ、そのような敵愾心を静め、不安を解消させ得るとしたら、それは個人が共同体という拠りどころを得るしかないのではないか、という見解を提示しているのである。単に個の抑圧からの解放・自律、という文脈でのみゾンバルトの共同体論を批判してはならない。

第三、精神により創造されたものへの精神自身の従属。先の議論の続きになるが、近代になって個人が技術によって自然の制約から解放され、また法的政治的自由化によって共同体から解放されて、それで一体本当に自由を獲得したのかと言うと、ゾンバルトは決してそうではないと言う。経済時代における人間は、実はその全生活が「一つの精神的形象の体系」(同、21頁)に縛られ、従属せしめられているのである。例えば消費の領域において、個人は自らが本当に求めているものを需要しているのではなく、欲求とその実現の仕方の双方とも生産の側から与えられているのである。そしてまたその生産においても、個人は真に自らの価値を実現するように労働をしているのではなく、単に経営を規制する規則の体系が定めた通りに、それに従属させられて動かされているに過ぎない、とされる(同、22～23頁)。「あらゆる装置、あらゆる機械が用いられるごとに、労働は、個人に自由な行動が許される多かれ少なかれフリーであるような雰囲気から、殺人的な強制労働と多くは耐え難い労働条件を有する大経営の地獄へと追いやられる」(同、24～25頁)。

こうして消費・生産双方の側から、近代人の生活形式全てが一様となり、単一化しようとする傾向が生じ、それが押し進められて行くので

ある(同、25頁)。ゾンバルトのこうした言説は、第二次大戦後本格化した大量生産・大量消費による労働と生活の画一化、という事態に極めて良く符合するといえよう(ただし最近、フレキシブル・スペシャライゼーションの議論に見られるように、変化の兆しも見える)。

技術時代

さて、こうした経済時代における生活の中で、近代人は三つの理想によって支配されると、ゾンバルトは言う。それは、感覚的に大きいもの、速く動くもの、常に新しいもの、の三点である。「現在一切の関心の中心に、測定し秤量し得る量に対する賛美が位置している」(同、47頁)例えば、タワーやビルの高さ、列車の運んだ旅客数、船舶の大きさ、新聞・雑誌の出版部数、都市の人口、これらの事柄の量が大きいければ大きいほど、人々の賛美が集まる。また、「自動車が百キロのスピードを出し(今ではF1の300キロか?…筆者)、飛行機が二百キロの速度を出す(今ではマッハの世界…筆者)ことが、現代では最高の理想として眼前に浮かんでいる」(同)。確かにゾンバルトの言うとおりであろう。そして、近代人の極端なまでのセンセーション好きが指摘される。近代人は未だかつて存在しなかったものへの魅力にとりつかれてやまない(同、46頁)。

近代人の関心がかつてこのような事柄に向けられているのは、「技術が悪魔であることを今日なお認識していず、技術とその奇蹟を、そしてその永遠の進歩を信ずる人が多い」(同、52頁)ことによる。すなわち、ゾンバルトは経済時代のもう一つの顔として、「技術時代」という側面を重視する。彼によると、近代は「尊

敬が技術に対してだけ払われるに到り、それが実現する目的に対しては、何等顧慮しない程度にまでなっており、それ故「手段のために目的を忘れていたが故に、いいかえれば、手段の巧みな構成の内に目的を見ているが故に、技術時代なのである。」(同、314頁)

ここで言う技術とは、人体器官の技術(歌や絵など)ではなく、用具技術あるいは物的技術であり、そして特にその中の機械技術を指している。そこで、ゾンバルトはそうした技術の持つ悪魔的な力の秘密を、次の点に求める。すなわち、近代技術の本質は、「生きた自然の制約からの解放」(同、310頁)、という点にあり、それが近代技術の破壊性をもたらしているのである。生きた自然からの解放とは、動力に関しては木材から石炭、石炭から石油、石油から原子力への移行であり、素材に関しては、木材や石から鉄、プラスチック、新素材へ、ということになる。

ゾンバルトは、「コークス精錬法の発明にこそ近代を理解する鍵があるとの確信が、繰り返し湧きおこる」(同、311頁)、と言っている。そこにこそ、技術に関する近代以前と以後との本質的な差異がある。近代以前においては、動力を場所に拘束されず自由に作り出せ増加できた場合、その動力は人間か動物であり、従って有機的に拘束されていた。また吹く風や流れ落ちる水が動力である場合、有機的に拘束されることはないが、しかし場所に制約されることになる(同)。「ところが近代技術は、動力をただ自由につくり出し増加させようばかりではなく、自然の有機化過程の助けなしに人工的に作り出す」(同、312頁)。すなわち、動力は機械化され、蒸気力、電力、爆発力が自由に使用され

るようになる。

技術がこのように生きた自然からの解放を達成し得た根本的要因を、ゾンバルトは、技術と近代自然科学との本質的結合、という点に見る。

「近代技術は、自然科学的認識の武器なしには一歩も進み得ないし、進もうともしない」(同、308頁)。そして、この「近代自然科学は、実践的な制服欲によってつくられた被造物」(同)なのである。ゾンバルトはベーコンを引用して、近代自然科学の本質的な事実を次の点に見い出す。すなわちそれは、「事物の秘められた運動を研究し、人間が物を支配する限界を拡大する」(同)、ということである。そのために近代自然科学は、世界を機械的または化学的な物と考える。それに応じて技術は、「自然科学が世界全体について立てた公式通りに動く一種の世界を、人工的に作り出す」(同、310頁)のである。

このようにゾンバルトにとって近代技術の根本的特徴は、本質的に自然への征服欲を持って進められる近代自然科学の認識活動に支えられ、かつそれに規定されて、人間を自然の有機制約から解放する、という点に存している。こうした技術が経済時代を支えているのである。

結 語

以上、シュンペーター、ヴェーバー、ゾンバルトの三者の資本主義論を概観し、それらの補完関係を見てきた。これらの議論が展開されたのは20世紀の初頭であり、そこには幾分預言めいた言説が多く存しており、それ故現実の経済の特定部分を誇張したところが少なくない。しかし近代的な経済のあり方を絶えず批判的に反省していくに際し、彼らが1900年代の初期に提

起した批判的視点は、良き指標となるだろう。

EC、アメリカ、日本といった工業先進国は、未だ彼らの直面した現実の延長線上に存在しているのである。

さて、冒頭に示した問いかけに戻ろう。それは既に以上の論述の中に示されているが、ここで改めて要約しておきたい。彼ら三者の資本主義論を通じて取り出された近代経済社会の根本的特質は、次の四点である。

第一、企業者による経済それ自身の自発的な発展(シュンペーター)。

第二、形式合理性の高度化に伴う経営組織の官僚制化(ヴェーバー)。

第三、他の全ての文化価値に対する経済的価値の圧倒的優位(ゾンバルト)。

第四、自然の有機制約から解放された技術(ゾンバルト)。

即ち、近代資本主義特有の経済発展という現象の根底に、近代特有の精神と技術の有り様が見い出されているのである。現代経済社会を学的に認識して行く場合、単に市場の機能性や行政的介入のあり方だけでなく、こうした四つの視点を指向することによって、より広く且つ深く討究できるように思われる。それ故今後の課題は、以上の視点を現代経済社会の経験的分析において有意義に使用し得るように、より詳細な概念枠組みへと仕立てあげていくことである。

文献略記号一覧

WWW : W.Sombart, Weltanschauung, Wissenschaft und Wirtschaft, 1938.

PEdmK : W.Sombart, Prinzipielle Eigenart des modernen Kapitalismus, 1925, in: Grundriss der Sozialökonomik, VI. Abteilung.

ド・社 : W.Sombart, 難波田春夫(訳)『ドイツ社会主義』

- 1934年(1982年)早稲田大学出版部。
- OdW: W.Sombart, Die Ordnung des Wirtschaftslebens, 1925.
- CSD: J.A.Schumpeter, Capitalism, Socialism and Democracy, third edition, 1950.
- TdwE: J.A.Schumpeter, Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung: eine Untersuchung ueber Unternehmervergewinn, Kapital, Kredit, Zins und den Konjunkturzyklus, Zweiten Auflage, 1926.
- GAzR: M.Weber, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, I, Vorbemerkung, 1920.
- SG: M.Weber, Soziologische Grundbegriffe, in: Wirtschaft und Gesellschaft, 5te revidierte Auflage, 1976, (1te Auflage, 1921), 1.Halbband, Kapitel I.
- SGdW: M.Weber, Soziologische Grundkategorien des Wirtschaftens, in: Wirtschaft und Gesellschaft, 5te revidierte Auflage, 1976, (1te Auflage, 1921), 1.Halbband, Kapitel II.
- pEGdK: M.Weber, Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, in: Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, I, 1920.
- VEdvH: M.Weber, Voraussetzungen und Entfaltung der buerokratischen Herrschaft, in: Wirtschaft und Gesellschaft, 5te revidierte Auflage, 1976, (1te Auflage, 1921), 2.Halbband, Kapitel IX 2te Abschnitt.

(博士後期課程第二年度生)